

「地域・生活者起点で日本を洗濯（選択）する国民連合」（せんたく）

～地域・生活者起点（生きかた、暮らしかた、働きた）の日本の変革を求めて～

発足の趣旨について

今日の日本社会の閉塞を直視し、いまこそ私たちは、覚悟を決めて立ち上がります。

政治改革・分権改革に取り組んできた「新しい日本をつくる国民会議」（21世紀臨調）を母体とし、下記の志を共有する各界の同志とともに、地域社会や生活者を起点とする新しい運動組織を立ち上げます。

私たちの運動の目標は総選挙です。来る総選挙を意義あるものとするため、総選挙に向けて活動を展開します。与野党の国会議員に呼びかけ、二人三脚で、「日本作り直し」の「平成の民権運動」を推進します。

1. 私たちは、戦後の「お任せ民主主義」「霞が関・官僚主導」を打ち破り、生活者である私たち自身が主役となって、地域社会や生活の現場から発想し、これまでの日本人の「生きかた」「暮らしかた」「働きた」を根本から問い直す「地域・生活者起点の日本変革運動」（平成の民権運動）を立ち上げます。そして、その行く手を阻む制度や政策があれば、かまわず踏み越え、すべての仕組みを臆することなくゼロベースで見直す「この国の洗濯」を呼びかけます。
 - (1) 国民の意識改革、自己変革の推進
 - (2) 「霞ヶ関・官僚主導」からの脱却、責任ある「政治主導」の実現（脱官僚、脱中央集権）
 - (3) 地域・生活者起点の「政策の作り直し」「国の仕組みの作り直し」（例えば、日本作り直しの政策として環境に対する考え方を根本から改めることに取り組みます）
2. 今年は平成元年に政治改革が始まってから20年、総選挙にマニフェスト（政権公約）が導入されてから5年の節目にあたります。場合によっては、総選挙も予想されています。今年は日本の将来を左右するきわめて重要な年になると私たちは考えます。日本の持ち時間が残り少なくなる中で、私たちは同じ「日本丸」に乗船する者として日本の現実と正面から向き合うことを、すべての有権者と国会議員に呼びかけます。
3. 私たちは、志を同じくする各界の同志とともに与野党の国会議員に呼びかけ、私たちの運動の趣旨に賛同していただけるならば、「地域・生活者起点で日本を洗濯（選択）する超党派議員連合」（仮称）として結集し、私たちとともに連携して活動し、議論を興すことを呼びかけます。超党派議員連合と私たちは積極的に交流を行い、認識の共有化を深めるとともに、次の総選挙に向けて、それぞれの党内において堂々の議論を行うことを求めます。
4. 私たちは、来る総選挙を真の歴史的な政権選択選挙とするために、政党が「国民との契約」の名に相応しい周到なマニフェスト（政権公約）を掲げて選挙に臨むよう運動します。そして、各党のマニフェストの中で、私たちが重要だと考えている事柄についてきちんとした方針を示し、有権者に説明責任を果たすことをすべての政党に求めます。

私たちの時代認識

国民生活の土台が崩れている

いま、私たちは、明日へのたしかかな希望も、こうありたいと胸をはれるような目標も、自信さえも失ってしまったと言われています。うんざりするようなニュースや、この社会がどこか狂いはじめているとしか思えないような事件も続いています。国民生活の土台が崩れている。もしかしたら、気づくのが遅すぎたのではないかな。そんな不安が広がっています。国も地方もすっかり体力をすり減らし、気の遠くなるような借金地獄の泥沼にはまり込んでいます。

カンフル剤に頼り、問題の根っこの解決を先送りにしてきた結果だと実は多くの人が気付いています。けれども、まだなんとかかなるさという「淡い期待」と自分だけは大丈夫という「思い込み」、他に手はないという「あきらめ」がその場しのぎの政策を延命させてきました。誰かがやってくれるだろうと思っているうちに、どうにもならない事態を招き入れました。そのつけは、いずれ自分の身の上にもふりかかってくるのに、それを思い描く想像力を私たちは持ち合わせてはいませんでした。

依存から自立へ

結局のところ、私たちは、いつのまにか「本気になる」ということを忘れてしまったのかもしれませんが。いまの政治はあまりにもひどいと誰もが嘆きます。しかし、私たちはそれでも本気で動こうとはしませんでした。

誰かに何とかしてもらおうとする「依存心」と「庇護」の意識。「親方日の丸」「護送船団方式」は仲間内では心地よいけれど、とても排他的です。庇護を求めてますます依存するから「お上意識」が骨の髄までしみ込んで抜け出せなくなります。自分を変える勇気も、社会全体を見わたす視野も、さまざまな立場の人たちに対する共感や連帯意識も育むことができません。「官から民へ」「中央から地方へ」という言葉は、私たちがこうした意識や仕組みから決別する決意と勇気をともなうはずのものでした。

「官から民へ」が叫ばれる中で「民」の脆弱も浮き彫りになりました。「官」の無責任ぶりや、「政治」が立ち向かおうべき問題から目をそむけ続ける姿も白日のものとなりました。「官から民へ」「中央から地方へ」だけでは何ら問題は解決しないこと、問われているのは私たち自身の「自立」意識であり、私たちが主役となって、中央・地方政府のあり方や政治の果たすべき役割を問い直し、立て直すことこそ急務であることも明らかになりました。

地域から日本の変革へ

いまの日本はかなりきわどいところを、ふらつきながら、どうにか踏みとどまっているといっても言い過ぎではありません。地域の経済や産業は疲弊しきっています。お役所の信用も地に落ちました。企業の倒産も珍しくはなくなりました。終身雇用制は崩れ、フリーターやニートなど雇用不安や働き方の格差も深刻化しています。

経済や産業だけではありません。国民生活の土台を支えてきた発想や仕組みがいたるところで崩れています。地球温暖化など環境問題はこれ以上放置することのできないぎりぎりの段階を迎えています。これからの人口構成や家族形態を考えると、いまの社会保障の仕組みや地域社会のあり方では立ち行かないことに誰もががっかりと気づいています。払い続けてきた年金もどうなるかわかりません。

しかし、こうなることは、もっと昔からわかっていたことです。輝かしい高度成長が終わって以降、私たちは精神的空白の中をさまざまに迷ってきました。

私たちは、このままでも何とかなるだろうという楽観主義と、多かれ少なかれもっている既得の権益を捨て去る時期に来ています。いまの仕組みの中でとりわけ既得の恩恵に与っている人は、その仕組みの寿命が尽き果てようとしていることを認識すべきです。この社会を構成するすべての立場の人たちが利害得失を正直に吐露する議論を始めることこそ、すべての改革の出発点だと考えます。ボールは私たちの側に投げ返されている。国民生活のフロンティアは、私たち自身が開拓するほかはありません。

いまこそ私たちは、覚悟を決めて立ち上がります。私たちは、私たち自身が主役となって、地域社会や生活の現場からこの国のあり方を根本から問い直す「地域・生活者起点の日本変革運動」を立ち上げます。そして、その行く手を阻む制度や政策があれば、かまわず踏み越え、すべての仕組みを臆することなくゼロベースで見直す「この国の洗濯」を呼びかけます。

平成の民権運動

すでにその胎動は始まっています。地域社会から、環境や福祉、医療の現場から、職場から、古い殻を抜け出そうとする新しい息吹が聞こえます。長い沈黙を守り続けてきた多くの人たちが静かにゆっくりと立ち上がろうとする、その足音が聞こえます。

いま、日本全国で始まっている既得権との戦いは新しいドラマの始まりを告げるものです。私たち自身が変わるということは日本の有権者が変わるということです。日本の有権者が変わるということは地殻変動をおこす政治のドラマが始まるということです。

地域・生活者起点の日本変革運動。それは、戦後の「お任せ民主主義」「霞ヶ関・官僚主導」を打ち破り、生活者が主役となる、国民の、国民による、国民のための新しい政治の実現をめざす「平成の民権運動」に他なりません。

ここに私たちは、「地域・生活者起点で日本を洗濯（選択）する国民連合」（せんたく）の発足を宣言し、来る総選挙にむけて、志を同じくする各界の同志とともに「日本作り直し」の「平成の民権運動」を推進する決意を表明します。